

令和八年度 東京純心大学 看護学部 看護学科

学校推薦型選抜試験（2期）【小論文】

試験問題

試験時間 60分

注意事項

- ・ 解答は、解答用紙に記入すること。
- ・ 問題用紙及び下書用紙は、試験終了後回収する。

受験番号

令和7年12月14日

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

※問題文については、朝日新聞社に無断で転載することを禁じます。

認知症治療の難しさは、「どこまで続けるのか」にあります。個人情報保護のために事実の一部を変更し、仮名でお送りします。アルツハイマー型認知症と診断された古沢圭吾さん(88)は12年前、内科医院の紹介で、私の診療所にやってきました。

経過は良く、自宅から大阪市内の当院まで電車を乗り継ぎ、受診を続けることができました。私の診療所は大阪市の認知症疾患医療センターで、診断後は地域のかかりつけ医か認知症サポート医に診療をお願いしなければなりません。介護や福祉、医療やボランティアなど連携できる態勢を作ることが大切だからです。

ところが彼は、地域の医療機関への紹介を断り続けました。「先生と会うのが基本になっているから、それを壊してほしくない」と言い続け、12年目を迎えました。

冬のある日、自宅の階段から転落して腰椎(ようつゐ)を痛め、歩けなくなってしまいました。そこで私は地域の内科、整形外科の先生に連絡しました。古沢さんの了解のもとで行うべきでした。

それを知った古沢さんは、内科、整形の診療や訪問看護を一切断りました。「私のことは私が決める。もう治療も受けない」と。認知症になって12年。「判断力はなくなっている」と考えた私のミスでした。彼には「自己決定の気持ち」があったのです。

私は大慌てで、古沢さんの自宅に行きました。勝手なことをした私に怒りを見せるどころか、来訪を喜んでくれました。通院できなくなったことを、むしろ謝罪し、まわりに迷惑をかけているのではないかと気遣っていました。その後、地域の見守りが大切だと理解してくれました。「先生と会えなくなるのは困るけど、地域で支えてもらうのは心強いですね」と。

私はよく「認知症はなったらおしまいではない。なつてからが勝負である」と言います。それなのに今回、諦めてしまったのは、むしろ自分のほうであったことに気づきました。

その後、改めて古沢さんの現状を伝え、地域でケアできる態勢を作りました。3カ月に1度の担当者会議には私も参加してほしいとの要望があり、急に身を引くわけにはいかなくなってしまいました。

認知症と向きあう古沢さんが自己決定を考える時、私はこれからも彼を見守る必要性を感じています。認知症を診ることは、共に人生を送ることなのです。

設問

出典 精神科医・松本一生「私のことは私が決める」(『朝日新聞』二〇二五年四月一二日 週末beによる)

承認番号(26-0101)

著者の主張を踏まえ、それに対するあなたの考えについて、具体的な経験や例を示しながら八〇〇字以内で論じなさい。

